

子供の叱りやう

羽仁もと子

一、叱る時の親の心持と

子供のとりやう

斯う云ふ事は、皆様の十分御解りになつて居られること、思ひますので、更めて申上げる程のこともありまますまいけれども、然し子を持つて知る親の恩と云ふことは、古しからの訓であります。實際に自分が子供を持つて、親の地位に立つて見なければ、どうしても氣の附かないことが澤山にあるのであります、その中でも殊に子供が親の言ひ付けを聞き入れなかつたり、善くないことをしたりした時に、叱られる其の言葉を、丁度自分の敵のやうに考へて、自分の爲めを思ふて、言つて下さるのだと云ふことは、なか／＼子供には氣の附かないものであります。これは成人ですらも、自分の爲めを思ふて注告をして下さる方の言葉を

好意を持つて受け入れる事が困難なものでありますから、まして子供には無理からぬ事なのです。實際に自分が親になつて、子供を叱らなければならぬ立場に立つて見ますと、成る程と、自分を叱つて下さつた御母さんの心持ちも、十分に考へるやうになつて來ますけれども、子供の間には、どうしても、それが出來ないものであります。然し、それが出來ないのだと申して、何時迄もその儘に捨て、置いてよろしいものでせうか、子供の時は解らないもので、今に成人になつて親の立場に立つやうになると、自然と解つて來るものであるから、その理解がつく迄、その儘にして置く外に、しやうのないものでせうか、若し親の躰け方で幾分それを正して行く事が出來れば、出來るだけ其の刹那々に子供の行を正して行く、と云ふ事が、大切でなからうかと思はれます、

二、子供は何故親の小言に

反感を起すか

私の考へますには、親が子供を叱つた時に、子供の反感を買ふと否とは、幾分親の叱りやう如何にあるのではありますまいか、例へて申しますと子供が善くないことをしました時に、それを懲らさうとして、そんな事をする、お父さんに言ひ付けますとか、坊やを置いて他方へ行つて仕舞いますとか。おばけが来て、連れて行くとか、其の他いろ／＼と子供の嫌がるやうな事を云つて子供を怖がらすやうな方法が、一般の家庭に行はれて居るやうであります。然しさう云ふ叱りやうは、餘り子供に力ある影響を與へないで、寧ろ反感を與へる方が多いのであらうと思ひます。勿論叱る方の親の心持ちは、子供の爲めになるやうに、どうかして子供を善い人にしやうと云ふ考へから、さう云ふ小言も出るので、子供には其の心持ちが通ぜないで、反つて、自分がお父さんに叱られればいゝ、おばけが来て連れて行けばいゝ。善い子にならなければいゝ、と云ふやうな、自分と

反對の立場に立つて、自分を叱るものゝやうに考へる。そこから親の小言に對する反感が子供の心に起きて來るのではなからうかと思ひます。

三、どうすれば小言を有効に

する事が出来るか

それでは、どうすれば子供に、さう云ふ反感を惹き起させないで、親の本當の心持ちを通せしめて、子供の行を正して行く事が出來やうかと申しますと、それは子供の性質に依つて必ずしも一様には行きますまいけれども、私の考へでは、それは、子供を叱る言葉なり、叱る時の母の態度なりに、非常な關係があると思ひます。で、子供を叱るには、今申したやうな、無暗に子供を怖がらせるやうな言葉を使はないで。當り前に、お前の斯う云ふ行が善くない事であるから、御愼みなさいと、十分子供の味方になつて戒める。そして猶、聞かない時には、お母さんは、これ程お前の

爲めを思ふから、斯う云ふ小言も云ふのである。どうにかしてお前を善い子供にし度いからである。と云ふ事を、温い情味を持つて、子供に云つて聞かせるのであります。詰り子供の情に訴へるのではありません。決して言ひ度くて小言を云ふのではない、其の儘にして置くと、何時迄経つても、善い子になれないから、小言も云ふのであり、お母さんはこれ程、お前の爲めを思ふのだから、今後十分慎まなければなりません。と云ふやうに、自分と子供とが一の立場に立つて、意見をするのであります、言ひ換れば、子供の不利益になるやうなことがあればよいと云ふ事を祈つて居るやうな、言葉や態度を使はない事であり、先きに申したやうな、おばけが来るとか、お父さんに叱られるとか云ふやうな、子供をおどかす叱りやうや、若しくは、冷かな理智の判断に訴へるやうな小言の仕方は、感情の激しい子供には、決して有益なものではなからうと思ひます。これは是

非とも情の方から入つて行く事が必要であらうと思ひます。

四、強い言葉で叱る時の心持

今一つは、初めて御子さんを御持ちになつた、若い方々から、能く聞く事柄であります、子供が自分の言ひ附けを聞かない時に、ともすると、語氣の強い言葉が出るので、自分ではよくない事だと思つて居ましても、思はず強い言葉が出て來るので、それは自分の心掛けの至らない爲めである。自分の修養が足りない爲めであるやうに思つて、自ら恥ぢて居ります、と云ふ事であり、然しこれは總の場合に悪い事だとは思はれませぬ。成る程、自分の心掛けの至らない爲めに、自分の短氣である爲めに、強い言葉を使はずとも濟む處へ、無暗と粗い言葉で子供を叱るのは無論よくない事でありませぬけれども、然し、子供には是非強い言葉で叱らなければならぬ、場合も往々あるので

あります。例へて申しますと、前に申したやうな子供の情に訴へるやうな叱り方で、幾度もく〜静に言ひ聞かせて居ましても、矢張り其の行が直らないと云ふ場合には、時として強い言葉で叱る必要が起きて來ます、例へば學校から歸ると、直ぐに本や袴を規定の場所に始末をして、それからお遊ひなさいと云ふ事を、幾度言ひ附けても聞き入れないで、すんぐ遊びに出ると申したやうな場合は、さう何時迄も優しい叱りやうばかり續けて居る譯には行きませぬ。さう云ふ場合には、強い言葉を與へて、親としての威嚴も幾分見せて置くことが大切であらうと思ひます。然し此の場合に注意すべき事は、其の言葉を出來るだけ短く、そして力強くする事であり、例へば寸鐵人を刺とでも申すやうに子供の心を引き締めて行く事が必要であります。

五、體罰はどう云ふ時に必要か

それから、體罰でありますが、これも與へないで済めば、これに越したことはありませぬけれど、これも是非必要な場合が往々起きて來るものであります。例へば、前に申したやうにいろ〜な方法で意見をしましても、どうしても聞き入れないで、悪い行が段々と長じて行くこと云ふやうな時には、幾分の體罰も必要になつて來ます。これは幼稚園や、小學校では、さう云ふ必要の起る場合は、毛頭ありませんが、家庭ではどうしても、これがあるので御座います。此の點は幼稚園で子供を御扱になつて居られる方々の御覽になる子供と、實際に母となつて見る子供と、少し違ふ處があるやうに思ひます。それは幼稚園や小學校では幾ら子供に打ち解けて、十分の親しみや、情愛を持つて接しましたが、子供の頭には、矢張り先生とか、學校とか云ふ觀念の挟まつて居りますから、どうしても他所ゆきの行儀が出るからであります。處が家庭では、十分に氣を許して、自由

な心になりましますから、どうしても我がまゝが出て参るので御座います。

勿論、子供ばかりではなく、成人に爲りましても、家庭は吾々の唯一な安息所でありましますから、家庭で他所行きの行儀を子供に強ゆるやうな事があつてはなりません。十分子供が氣を許して、出来るだけ自由に遊び得るやうにして、置かねばなりません。然しそれが極端に行つて、御母さんの云ひ付けも聞かなかつたり、善くない遊び方をして、それを幾度止めても聞かないと云ふ場合には、今度は一段上の方法で、それを叱る必要が起つて参ります。

六、どうすれば體罰の度を

減ずる事が出来るか

それでは、此處にいよいよ體罰の必要が、起つて來るかと申しますと、私の考へではいよいよ體罰と云ふ迄には、もう一の他の方法がなからう

かと思ひます。それは體罰の豫告を子供に與へるので御座います。詰り、お前に幾ら云つて聞かせても、御母さんの云ひ付けを守らないと、仕まひに、體罰を與へても守るやうにせなければならぬから、さう云ふことのないやうに御慎しみなさい、今度聞かなければ、いよいよ體罰を加へますから、と云ふやうにして、尙必要な場合には、體罰を受けるやうな事があつては、大變な恥であることと云ふことを説いて、其處に子供の反省心を惹き起すと同時に、幾分名譽を重んぜしめるやうにするのであります。それでも尙聞き入れない子供は、致し方ありません。けれども、少くともなぐられたり、押入れへ入れられたりする事を恥と思ふ事の出来る子供は、そこ迄行けば、大い聞き入れるものであります。又それを聞き入れるやうにする位は、平常の躰で出来なければならぬのであります。

若し此處で子供の不從順を止めて行くことが出

来れば、それだけ體罰を與へる必要が減じて行く譯であります、勿論子供の性質に依つては、さう云ふ叱りやうもする必要のない子供もありますけれども中には、なか／＼暴い性質の子供もあり殊に男の子には、それが多いのであります。さう云ふ子供に對しても、無暗に怖がらしたり、親の短氣から暴い言葉を使つたり、考へなく子供の頭へ手を上げるやうな事をしないで、それは極く心要な場合だけに止めて置いて、而も、それをする時は一度で十分聞き入れるやうにせなければならぬと思ひます。強い叱りやうを再び續けなければならぬことになりますと、それだけ叱りやうの程度が高くなつて來る譯でありまして、遂には、體罰が普通の叱りやうになつて仕まうやうな事がなことも云へないと思ふのであります、以上は家庭の育児上に心付いたまゝを申し上げた譯で御座います。(文責在記者)

哺乳兒榮養法

本間辰藏

哺乳兒期即ち生後一年間は尤も死亡數の多き時期であります、其原因は大部分胃腸の病であります、然らば胃腸の病の原因は何かと申しますと、食物即ち乳汁の良否と、授乳法の不適當とにより、ます、依て二三の書物を參考として、哺乳兒營養法に就て少しく申上る事と致します。

扱て小兒が初めて生れますと、三つの點に於て大變化を來します。即ち

一、哺乳 母の胎内に居る時は胎兒の營養分は母の血液より受け胃腸は働く必要もなかつたものが生後は今迄母子の血液交通道でありました臍帶が切られて、營養分の供給を斷たれます。そこで口より營養分即ち乳汁を飲んで消化しなければならぬ事になります。

二、體溫維持 母の胎内に居る時は常に一定の溫